

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

負の資産「廃校」を、都市農村交流と住民コミュニティの舞台に転換

受賞者 きぎょうくみあい **企業組合くれば**
しずおかけんしまだし
 (静岡県島田市)

■ 地域の沿革と概要

静岡県島田市川根町笹間地区は、平成20年4月に島田市と合併した旧はいばらぐん榛原郡川根町かわねちやうにあり、一級河川大井川の支流である笹間川に沿って、急峻な山間に点在する10の集落からなる地区である。島田市の中心部からは北へ35kmに位置し、標高は200～500mである。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

笹間地区は、かつて東海道の裏街道「笹間街道」として物流で栄えるなど、歴史のある地域である。地区の基幹産業は、茶業や林業であるが、近年は価格の低迷など厳しい環境におかれている。

また、旧川根町の人口は昭和35年の10,451人をピークに減少し、平成26年には約半分となっている。笹間地区も人口減少と高齢化が進行しており、平成26年現在の人口は対平成12年の66%、平成26年4月現在の高齢化率は57%である。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 基幹産業の停滞と過疎化の進行に危惧を抱く

笹間地区は傾斜地であるため、基幹産業である茶業の機械化や規模拡大が難しく、収益性を高めるのは厳しい状況にある。そのため、茶農家は後継者もなく、地区の茶農家数と茶園面積は共に減少していた。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要（笹間地区）

事 項	内 容
地区の規模	集落の集合体
地区の性格	機能的な集団等
農 家 率 (内訳)	74.3%
	総世帯数 179戸
	総農家数 133戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 33戸 1種兼業農家 21戸 2種兼業農家 44戸
農用地の状況 (島田市) (内訳)	総土地面積 316ha 耕地面積 33ha 田 7ha 畑 26ha 耕地率 10.4% 農家一戸当たり耕地面積 0.2ha

茶業の衰退に伴い、平成2年頃には笹間小学校へ入学する児童数は10人を割るようになり、笹間小・中学校の存続が話題となるようになった。

産業の衰退、住民の高齢化、むらの拠点である小・中学校の存続問題などによって地域の活力減退が危惧される中で、平成2年に有志十数人により「なんでも、まずやってみよう」を合言葉として「なまずや会」が結成された。

イ 「なまずや会」による模索

なまずや会では、「まず自分たちが行動して、町、県を動かそう」と静岡市内で「川根・笹間を紹介する会」を開催し、笹間のPR、特産品販売等行うほか、笹間地区に都市住民を迎え、山イモ、ハチノコ、キノコをみんなで料理する山イモ交流会等を開催した。

その後、廃校を防ぐための取組も行ったが大きな成果は上がらず、平成19年3月に笹間小学校・中学校は廃校となり、川根小学校・中学校に統合された。

ウ 小学校・中学校の廃校をめぐる議論と方向付け

平成18年6月、川根町役場と地区住民によって「笹間地域活性化等促進協議会」が設立され、元笹間小・中学校校舎と笹間地域についての今後の方向をめぐって議論を重ねる中で、住民は「廃校になるのは仕方がないとしても、高齢化の進んだ笹間では、子供は活力源になる。なんとか子供たちの元気な声を笹間に残したい」「人と人のつながりを大事にしたい。人が集まる場を残したい」といった気持ちを募らせていった。そのような中、なまずや会会員等の有志は、小学校校舎の整備後に施設の管理運営を行う組織として「ささま美土里楽舎くれば」を設立した。

一方で、都市住民との交流を促進させて地域の活性化を目指すため、島田市は「笹間地区活性化計画」を策定し、平成21年に農山漁村活性化プロジェクト支援交付金により廃校となった小学校校舎を宿泊体験交流施設「島田市山村都市交流センターささま」（以下「交流センター」という。）として改修した。

そして、交流センターを運営管理する組織として、「ささま美土里楽舎くれば」が軸となって平成21年に「企業組合くれば」（以下「くれば」という。）が発足した。

エ 「島田市山村都市交流センターささま」における交流の取組

平成21年4月に交流センターが市の直営で開館し、平成22年からくればが指定管理者となった。交流センターには研修・会議室、体育館、音楽室、宿泊室、食堂、調理室、運動場などがあるため、くればはそば打ちやピザづくりなどの農産加工体験、川遊びやヤマメのつかみ取りなどの自然体験、陶芸教室、竹細工教室など多くの体験メニューを用意して

おり、平成25年度の利用者数は2万人を超えた。

また、交流センターにおいて、平成22年に陶芸家「道川省三」氏による陶芸教室を開催したことが契機となり、平成23年11月と平成25年11月の2回「国際陶芸フェスティバルinささま」を開催した。多くの来場者を得て、国際的な大きなイベントを成功させたことにより、住民は大きな自信を得ることができた。



写真1 山村都市交流センターささま

(2) むらづくりの推進体制

ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

くれば組合員は、個人25人と団体1団体により構成されている。構成員は、農業者を中心に、大工、僧侶、魚屋、民宿経営者、森林組合勤務者、会社員など日頃から地域の中核を担っている人たちである。このうち女性は4人で、農業者と民宿経営者である。組合員以外には、交流センターの日常管理と運営のため、館長を含む4人の常勤職員と18人の臨時職員が地元から雇用されている。

くればでは、組合員を施設管理、体験、食事提供、イベントの事業ごとに担当を分けている。事業の企画については、担当者が提案し、役員会を経て決定するが、事業の実施に当たっては、全組合員が協力している。

また、くればを企業組合という法人格とした理由は、

- ① 将来は利益を生みだし、地域に還元するという目標を明確にすること、
 - ② 組合員が同等の権利を持ち、全員の合意でむらづくりを進められること、
 - ③ 静岡県中小企業団体中央会の緊密な支援を得られること、
- である。

イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

① 地元の団体と密接な連携

平成18年に発足した「NPO法人 森づくりS川根NPO」は、くればの団体会員であり、林業振興の面から連携してむらづくりを進めている。くれば組合員25人のうち16人はこのNPO法人の構成員でもあり、両団体は車の両輪としてむらづくりを担っている。

「ささまふれあいの里管理運営組合」は、20人の女性が参加して農産加工体験施設「ささまふれあいの里」を運営し、交流センター利用者の食事づくりを行っている。この女性たちは、交流センターの臨時

職員として、様々な体験の協力者として活躍している。

「笹間神楽保存会」は、当地区に伝わる民族芸能「笹間神楽」を守り、地域文化の伝承に取り組んでいる。

くればでは、以上の団体と連携して活動を行っており、笹間地区の住民から理解を得るため、活動報告会を毎年開催している。そのほか、くればは交流センターにおける笹間地区町内会の行事へ協力するとともに、交流センターを防災拠点として機能を果たすことができるように管理運営を行っている。

② 行政等との連携

島田市は、都市と農村の交流、交流センターの運営管理、スポーツ合宿の受入れ、茶等の生産振興などについて、くればを支援している。

静岡県中小企業団体中央会は、くればの設立を指導し、その後の運営や事業を支援している。

静岡県志太^{しだ}榛原^{はいばら}農林事務所は、平成21年度から交流センターを核とした笹間地区の活性化を重点課題として位置付け、交流センターの整備やその円滑な運営を図るためのワークショップの開催を支援している。

ウ むらづくりに関して連携する他の組織や団体との関係

① グリーン・ツーリズム施設との連携

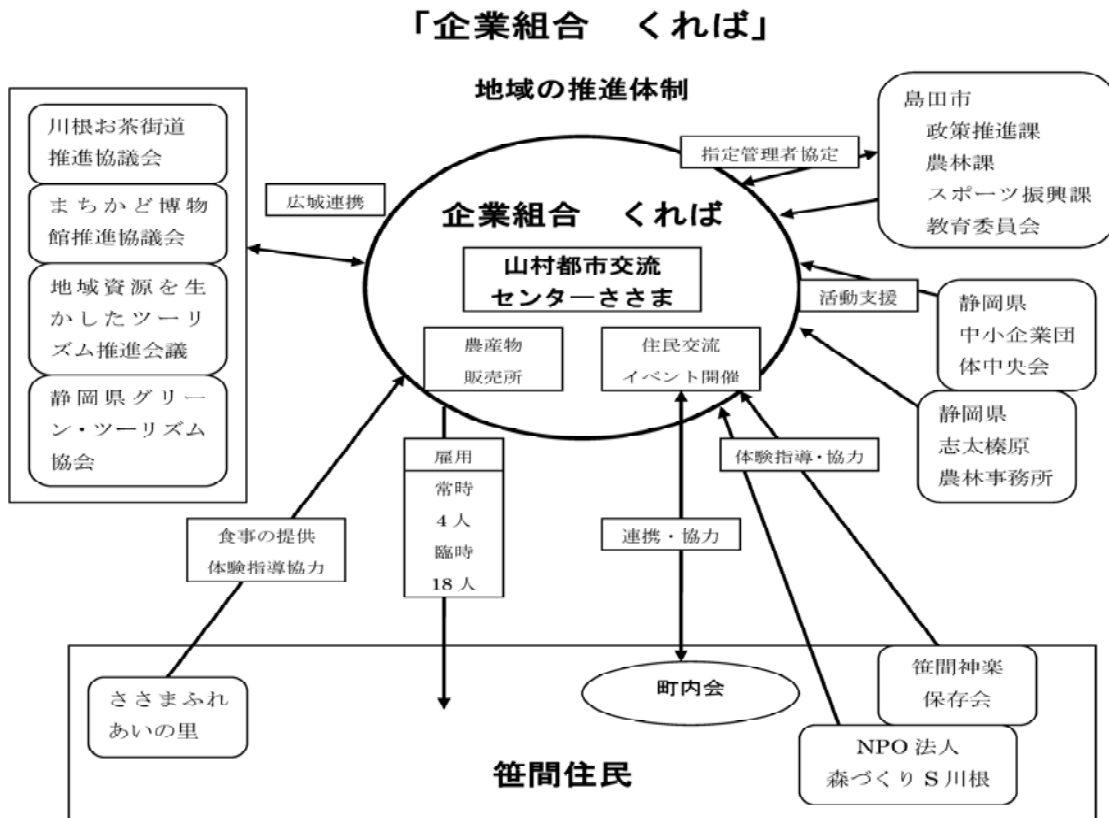
「天空の回廊」と呼ばれる島田市北部から藤枝市北部にまたがる中山間地域において、くればが中心となって9つの団体等と「地域資源を生かしたツーリズム推進会議」を組織している。ウォーキングの実施、「山の駅弁大会」の開催、そば栽培・加工体験などを行うツアー商品の開発、人材育成などに取り組み、「天空の回廊」を周遊する人の増加を目指している。

② 大井川流域の施設や団体との連携による都市農村交流と茶業振興

島田市と川根本町は、同市町内における大井川流域の地域全体をエコミュージアム（屋根のない博物館）、地域の施設や個人宅などを「まちかど博物館」と位置付け、都市住民が「まちかどめぐり」を行って地域の人と交流することを目指しており、交流センターは交流の中心施設とされている。

また、くればは川根茶産地における茶生産団体や茶流通団体等により組織された「川根お茶街道推進協議会」の事務局として、川根茶の生産・販売を行うほか、歴史・文化・暮らしの視点から、「川根茶の日」（4月20日）の制定、川根茶塾の開催などによって、川根茶の振興を図っている。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

くれば組合員は、笹間地区において、

- ① 子供たちの元気な声が響き、お年寄りと交流ができる住民の居場所をつくること、
 - ② 交流センターを住民の集まるサロンとすること、
 - ③ 雑木林で子供が遊ぶ「ささっ子の森」を作ること、
- について強い思いを持っており、いずれは旧校舎において「山の学校」を開校し、短期間でも良いので笹間小・中学校を復活させたいと考えている。

笹間地区は、基幹産業である茶業と林業が厳しい環境にあり、人口減少と高齢化が進む中であっても、閉校となった小学校を交流センターとして生まれ変わらせ、そこに多くの都市住民を迎えている。その結果、くればと住民の願いである子供の歓声が響き、住民が集まる場がよみがえりつつある。

廃校、空家、遊休農地等を貴重な地域資源として活用できたことと、陶芸という新たな資源を獲得したことにより、住民は自信と誇りを取り戻し、むらづくりへの意欲を高めている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 地域特産品の販売と農地の再生

交流センター内に農産物販売所と食堂を設け、利用者に笹間産のお茶、しいたけ等を販売するほか、ささまふれあいの里や地元の民宿が笹間産の農産物を多く利用した食事を提供している。交流センターにおける農産物と食事の販売額は年間約300万円で、農家の所得向上に貢献している。

このほか、くればは年間40万人が訪れる道の駅「川根温泉」の会員として、道の駅内の農産物直売施設において笹間地区の茶・しいたけ、林産加工品等の農林産物を販売している。

また、交流センター周辺の農地を体験の場として活用したり、管理されなくなった茶園を体験農園として整備してもや麦等を栽培したりすることによって、遊休農地の解消にも貢献している。

(2) 笹間100年の森づくり

くれば組合員である「NPO法人 森づくりS川根NPO」は、「笹間100年の森づくり計画」に基づき、これまでに約100haの森林で間伐や作業路整備等を行って優良な森林を維持し、雇用の場の確保に貢献している。

また、笹間地区において陶芸やキャンプファイヤーが行われる際に必要な薪まきを調達する役割も担っており、中でも陶芸で使われる「アカマツ」は地元産だけでは不足するため、調達のために県外まで出かけることもある。

(3) 雇用の場の創出と女性・お年寄りの役割づくり

くればは、地元から職員を雇用して交流センターの管理運営に当たるとともに、地域に新たな雇用の場を創出している。

また、交流センターにおける体験では、地域住民が指導者や補助者の役割を担っており、竹飯づくりやそば打ち、ぼた餅づくりなどの笹間地区の伝統食文化の体験では、女性やお年寄りの役割が大きい。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 多くの都市住民が訪れ、笹間に子供たちの歓声が広がる

交流センターが開館する以前の当地区の交流人口は200人余であったが、平成25年度の交流センター利用者数は2万人を超えるまでになっている。利用者の約6割は、大学生以下の青少年と、スポーツや文化活動の合宿、家族旅行で訪れた子供たちである。住民は、運動場や笹間川で遊ぶ子供たちの声によって、かつてのにぎやかな頃を思い出している。

交流センターでは、20種以上の体験メニューを用意しており、くれば組合員や



写真2 運動場をかける子供たち

住民がその体験指導をしながら利用者と交流している。体験で使用する陶芸窯やピザ窯とその建屋、バーベキューハウスは、くれば組合員による手づくりである。

利用者からは、「地元の人と話ができてよかった」「いもがら、しいたけ、お茶がおいしかった」等の感想が聞かれ、約7割がリピーターとなっている。

(2) 新たな地域文化「陶芸の里 ささま」へ ～戸惑いから自信と誇りへ～

地域の代表や専門家、行政等は、実行委員会を組織して「国際陶芸フェスティバルinささま」を開催している。第1回を平成23年11月に開催したところ、500人ほどの集落に海外陶芸家20人と国内陶芸家50人を含む約1,500人が来場した。

当時、くればの理事長は「陶芸となじみがない笹間で、当日までどんなイベントなのか想像もできなかった」と不安を抱え、地域の理解を得なければならない難しさを感じていた。しかし、笹間地区を会場に選んだ陶芸家道川氏の「日本では前例のないイベント。陶芸と関わりのない笹間だからこそ意義がある。」という言葉に勇気をもらい、開催にこぎつけた。

第2回は平成25年11月に開催し、約4,000人が来場した。くればは、できるだけ多くの地元住民の参画を促すため、海外陶芸家を対象とする民泊、イベント参加者に地元料理を提供する「ささま食堂」、地区内における作品展示や「縁側カフェ」を企画し、住民の5人に1人となる約80人が役割を担った。



写真3 ささま食堂

一方、交流センターには、平成25年に住民の手作りによって穴窯「ほたる窯」や電気窯が設置され、形づくりから焼成まで本格的な陶芸体験ができるようになった。

今後、フェスティバルは2年に1回の開催が予定され、地区内においては陶芸作品等の展示会場づくりなども検討されている。住民は、笹間地区がいつか「陶芸の里 ささま」と呼ばれるようになり、一流の陶芸家が工房を構えて「ほたる窯」を用いて作品を制作してほしいと夢を描いている。



写真4 陶芸教室

(3) 交流センターは笹間住民のよりどころ

くればは、町内会と協力し、交流センター（旧笹間小学校）を会場とし

てささま夏祭り（8月）やふるさとまつり（11月）を開催しており、いずれにも地区人口を上回る500人余りが集まっている。まつりの参加者は思い出の旧小学校に宿泊できるため、そのことを目的に帰省する者もいることから、交流センターは笹間地区の住民にとってコミュニティ醸成の場となっている。

（4）伝統文化の保存継承

伝統民俗芸能「笹間神楽」は一時消滅しかけたが、昭和43年に地元青年団（のちの笹間神楽保存会）によって伝承活動が始まり、現在まで続いている。昭和52年からは、地域の子供に伝統芸能を伝えられるように、川根中学校の教育活動に笹間神楽が取り入れられている。現在は、交流センターを練習会場として保存会が笹間神楽の指導に当たり、毎年生徒らによる神楽が上演されている。



写真5 笹間神楽の上演

そして、平成25年の第2回国際陶芸フェスティバルにおいて陶芸家道川氏と笹間神楽が競演したことがきっかけで、平成26年4月にフランスの陶芸展に笹間地区保存会が招待されて神楽を舞い、笹間地区の文化を海外にPRしている。

（5）移住者やUターンが徐々に増加

笹間地区は人口が減少しているものの、豊かな自然や人の優しさに惹かれて地区外から移住する者や、親元に戻ってくる家族と若者が見られ、移住した世帯はここ10年で8軒である。移住者は、交流センターのピザ体験指導者や、笹間神楽を伝える外国人女性など様々であり、いずれの方も地域に溶け込んでいる。

（6）情報発信により、笹間のファンを開拓

くれば事務局では、新聞・テレビ等によってむらづくりの取組を情報発信することを心がけており、25年度は26件の新聞掲載があった。また、交流センターのホームページにおいて、平成21年10月から平成26年3月までの1,600日余りにわたって毎日、写真付きで笹間地区の情報を発信しており、閲覧件数は毎日数十件を数えている。